

# 「聖岳洞穴調査」

## ボランティアの記(1)

矢野 徳 弥

(会員 南海郡本匠村)

はじめに

昨年十二月十日から同二十四日まで実施された聖岳洞穴調査について、其の調査結果と研究の成果が正式に発表されるまでには、今後なお相当の時間がかかるものと考えられる。

「報告書が出来たらかならず送る」と、調査団の方が約束されたので、そのときは、いずれ本誌で詳しく紹介することにしたい。

今回はたまたまボランティアの一員として此の調査に参加したので、その際提供された資料、作業の体験、専門家に教えられたこと、講演会のノートなどから、素人目で見、聞き、また知り得た調査の概況を、とりあえず会員の皆さんに紹介することとしたい。

近く聖岳洞穴の再調査が行われることになったこと、知らされたのは昨年七月のことであった。

かねてから聖岳洞穴の顕彰に熱心で、「佐伯史談」先号(二八二号)に「中国柳州シンボジウム参加日記」を寄稿された柴田幸夫氏(前本匠村教育長)のもとに、此の旅行で知り合った別府大学の橘昌信教授、鹿児島大学の小片丘彦名誉教授から、相次いで調査協力依頼があったというのである。

これまで、「日本列島における更新世(旧石器時代)人類化石は、これまで十数カ所の発見例がある。そのなかで聖岳洞穴は、旧石器と人骨が同じ包含層から出土した唯一の例」と高く評価されながら、其の貴重な標本資料は新潟大学医学部解剖学教室の標本室に長く眠ったままであった。

この洞穴で発見された化石人骨は、いったん発見者小片保教授の教室に持ち帰られ、其の研究成果は一九六七年「洞穴遺跡出土の人骨所見序説」として報告されたが、その数年後研究の更なる深化を待つことなく同教授が急逝したため、研究は中断された形で今日に及んでい

かねてからこのことを残念に思っていた私たち村人にとって、再調査の実現は待ちに待った大きな朗報であった。

### 一 再調査の意義

ところで、どうして今頃再調査が実現する運びになったのだろうか。少し長いが調査の資料により、今度の調査の意義と目的について紹介しておきたい。

日本人および日本文化の起源に直接関連する日本列島の後期旧石器時代遺跡はおよそ四五〇〇箇所が存在し、石器を主体とした膨大な量の資料が発見されており、それらに基づいた研究が進められている。しかしながら、それらの石器を製作・使用して、いかなる生活をしていたかについては、現時点では不明と云わざるを得ない。

このような日本列島の旧石器時代研究状況の中にあつて、昭和三十八（一九六三）年、日本洞穴遺跡調査特別委員会で実施された大分県南海部郡本匠村の聖岳洞穴の発掘調査（代表賀川光夫・小片保）で、後期旧石器時代の化石人骨が発見され、さらにこの人骨に隣接

する洞穴内で、黒曜石製の旧石器が出土したのである。

聖岳洞穴は日本列島で化石人骨と石器が一緒に発見された唯一の例であり四〇年余り経過した現在でも聖岳洞穴以外にはこのような遺跡は発見されてなく、日本列島における現生人類ホモサピエンスの形質人類学的研究や旧石器時代の葬制、さらにはそれにかかはる生活様式などについてはほとんど解明されていないのである。

そこで改めて当洞穴の重要性が再評価されるとともに、その一方①当洞穴で発見された化石人骨は頭部の一部のみでそれ以外の人骨の部位は出土してなく、それらが洞穴内に遺存しているかは不明であり、②また石器についてもそれが人骨に伴う副葬品なのかどうかも定かでなく、さらに正確な年代決定を欠いているなどの具体的な課題も残されている。

今回の調査はこれらの問題を明らかにすることを具体的な目的としながら、合わせて多角的な視野と総合的な問題意識を持った聖岳洞穴の学術発掘調査の必要性に鑑み学術発掘調査を実施するものである。

## 二 調査の方法

### (調査の期間)

一九九九年十二月十日から二十四日まで、休日なしに十五日間とし、調査の状況によっては二〇〇〇年に第二次発掘調査を計画する。

### (調査の方法)

調査の方法は、あらかじめ次のように決められた。

①前回の調査地点を中心に周辺を広く発掘し洞穴内全体で石器、人骨、ほかの動物の骨などを探す。同時にその分布範囲などを明にする。

②残土を洞穴外に搬出し、水洗して遺物の有無を再確認する。

③洞穴の環境データを収集(年代測定、土壌分析、石材原産地の分析、地質学的分析など各種の自然科学的分析)を行う。

### (調査団)

此の調査は、平成十一年度文部省科学研究費特定領域研究「日本人および日本文化の起源に関する学際的研究」の考古学班が、この年全国六か所で行った発掘調査のうち、別府大学考古学研究室と国立歴史民俗博物館が

主体となって実施するもので、

団長 橘 昌信(別府大学)

九州旧石器文化研究会長、考古学(石器)

副団長 春成秀爾(国立歴史民俗博物館)

人類学、目下沖縄・九州におよぶ南東文化の研究に専念。

副団長 小田静夫(東京都教育庁)

考古学(石器)

考古学班長 辻本嵩夫(民間調査機関バリノ・サーベ

イ)

考古学(自然科学分析)

人類学班長 榑崎修一郎(群馬県立自然史博物館)

佐伯市出身、人類学、一昨年ジャワで原人

の歯を発見したことで有名。

考古科学班長 松浦秀治(お茶の水女子大)

考古科学(年代測定)

古脊椎動物学班長 河村善也(愛知教育大)

考古学(古脊椎動物の遺物)

顧問 賀川光夫(別府大学)

考古学、前回の調査で考古学部門を担当。

小片丘彦(鹿児島大学)

解剖学、前回の調査で人類学部門を担当した故小片保氏の甥に当たる。

以上の専門家を中心に、考古学班 一〇名

考古科学班 一名

古脊椎動物学班 三名

人類学班 四名

と、別府大学、愛知教育大学などの学生二〇名余りが調査に参加する。

※専門分野は、講演会の際、司会者小田静夫氏が行った紹介を引用。

### 三 受け入れ準備

本匠村及び本匠村教育委員会は、調査の受け入れについて全面的に協力することを決め、佐伯広域森林組合に委託して村道から洞穴入口に通ずる通路を整備し、更なる調査のため洞穴から道下の小川まで残土を運ぶ索道を架設するとともに、村所有の非常用発電設備を現地に運び洞穴内に照明を設置、また洞穴入り口近くの段差の部分にハシゴを取り付けるなど、ハード面の整備を行っ

た。

また調査を助勢するボランティア要員の手配、聖岳洞窟に関する講演会の開催などソフト面の準備も調べ調査の日を待った。

### 四 佐伯史談会の事前見学会

史談会では、かねてより此の洞穴の見学会を持ちたいと検討を進めていたが、今回再度の学術調査が実施されると知り、「通路の整備が終わり、なおかつ遺跡の現状に変更が無い時点」というギリギリの選択として調査前日の十二月九日、急ぎこれを開催した。当日はさいわい天候にもめぐまれ、地元会員を含め二一名が参加し盛況であった。此のときの資料により、調査前の洞穴の状況(調査団提供、一部付図参照)を概略紹介しておく。

### (洞穴の位置)

聖岳洞穴は、本匠村大字宇津々、番匠川の支流波寄津川の北岸、絶壁の上部に開口している鍾乳洞で、標高は約二四〇<sup>メートル</sup>、谷底との比高は約一九〇<sup>メートル</sup>、このため平均斜度は三〇度を越え、現地まで徒歩で二〇分以上を要する位置にある。

(前回の調査  
状況)

一九九五年

二月、佐伯史

談一六八号

「聖岳化石人

骨を読む」で

紹介したが、

今回は付図1、

付図2を再録

したので参照していただきたい。

なお、洞穴内の基本層序は

第一層(表層) 黒色土層一〇〜一五センチ 中世の人骨、

金属片、土器片、宋銭など散乱。

第二層(中層) 粘質砂礫層一五〜二五センチ

遺物なし。

第三層(深層) ニメートル以上。

遺物の出土状況(図1参照)は

第一地点 細石刃

第二地点 台形様石器、石核



図1

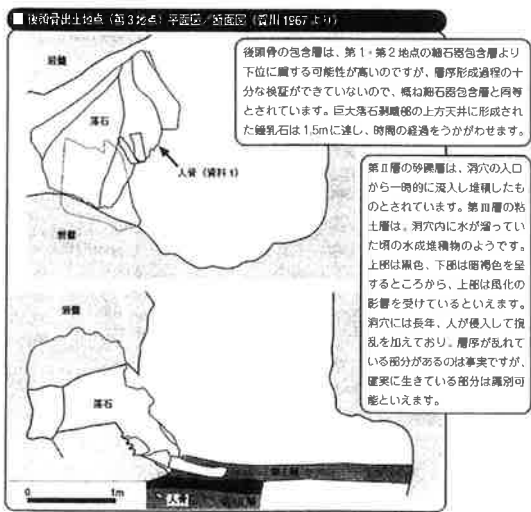


図2

第三地点 ヒト後頭骨、ヒト頭蓋骨片など

で、これについては、本匠村教育委員会の吉良英生教育長、久々宮克也主事、宇津々出身の会員染矢賢一氏から洞穴内でより詳細な説明をいただいた。厚くお礼申し上げます。

## 五 ボランティア

調査は予定通り十二月十日から始まった。この日は別府大学考古学班の手で標本区の設定などが行われたが、結団式などがあるが本格的調査は十一日からとなった。調査手伝いのボランティアは、主として村の文化財調査委員とアカデミアの会員(県の高年大学の受講修了者の団体)の中から出ることになっていた。

しかし、今回の調査はあくまで専門の学者が中心で、補助者にも考古学や人類学を学ぶ学生を用いる計画であったから、私たちが手伝いに出るのは、多少なりとも文化財に関心をもつ人に調査の体験を与えようとする教育委員会のあたたかい配慮であったと思われる。

私に当てられた予定は第四日(月曜日)であったが、この日は支障があったので、朝八時半ころ現場上り口まで断りに行った。此のとき調査班の人達はほとんど山に上がっていて、一三人の学者が何か打ち合わせをしていたが、その一人が国立歴史民俗資料館長の佐川真先生であった。私はあらためて今回の調査の重要性を教えられた気持ちであった。

谷に下りてみると五人ばかり若い研究者たちが、山か

ら降ろされた残土を水洗調査していた。土曜、日曜も休みなく発掘を実施したといい、残土を入れた番号の付いた大量の土のうが川岸に並べられ、索道からはなおも次々と土のうがおろされていた。どうも手が足りないようであった。

### (初回の作業奉仕)

翌十四日、私と柴田幸夫氏が出役した。私たちに与えられた仕事は、研究員の人たちと同じく残土を篩にいれ水で洗って、洞穴で収集漏れした遺物をさらに徹底して探すというものである。

いっしょに作業したのは滝川渉(東北大)、中島雅典(東大)、清水大輔(京大)、長岡朋人(阪大)といった諸君で、いずれも人類学を専攻する学者の卵である。

作業はなかなか根気が必要であった。一つの土のうに入っている残土は大体人間の頭ぐらいの塊で、これを三つぐらいに分け篩にのせて水洗いする。篩は五ミリのものと、それより一回り大きいものがあり、遺物の含まれる可能性の高い残土は細かい目の篩を使用する。その日私には細かい目の篩が渡された。

細かい目の篩はなかなか粘土が濾過できない。炭化物が

含まれていると浮くから特別にいいいにして欲しいと言われ、流れに浸して少しづつほぐしてゆく。かがんでする作業だからすぐ腰が痛くなる。一時間ばかり続けたところで粘土は溶出して、コップ半分ぐらいの砂が残った。その中から遺物を探すのである。

此の作業を二回行ったところで昼になった。私の篩から出たのは五ツばかりのコウモリの骨、それに仁丹の粒より少し大きめの炭化物、ヒバの葉先大の炭化物の三つである。遺物は清水氏の手によって記録され、小さなビニールの袋に収納された。昼まで頑張った成果がたったこれだけである。「学問は好きだが、考古学者だけはごめんだな」と、柴田氏が冗談を言う。

しかし、炭化物の出たことはうれしかった。調査員の人達によるとこれまでかなりの老化物が得られているという。日本列島の化石人骨遺跡で炭素による年代測定が出来ているのは沖縄県の港川だけだが、今回の調査で聖岳人骨の年代測定にも大きな進展が期待できそうである。

※炭素14の崩壊が5730年で半分になることから、資料の放射線の量を測定することで、確率的に年代

の推定ができる。

この日は夕方までこの作業を続けた。

(再度の作業奉仕)

十七日、再度の作業奉仕に出た。この日は声刈成雄氏といっしょであったが、山(洞穴)でも谷(洗い場)でも、いくつかの興奮させられる出来事があった。

調査班の作業スケジュールはかなり厳しい。朝七時三十分に宿舎を出発、同四十五分現地に着、八時から洞穴班は登山を始め、谷川班は作業に入る。昼休みは三〇分、作業終了は当初の予定より三〇分遅く、洞穴班も四時三十分ごろ山から降りてくる。しかし、この日はずいぶん遅くなった。

この日の私の篩の網目は大きい方だったので、前回よりは少し早く進んだ。

午前九時ごろだった。多数のカメラを下げたNHKの記者一人が研究員の了解を得て登山して行った。

此のとき私の篩の中に、直径四ミリの長さ三センチぐらいの骨片が見つかった。研究員の話では「これまでにいくつも出ている。これは子供の指の骨と思うが旧石器のものか、中世のものか年代を調べねば何とも言えない」と話

していた。やがてまたひとつキウリの種に似た白いものを見つけた。研究員によると「これは小児の歯で第××歯」と言われたがよく覚えていない。今日はなかなか面白いなと感じた。それからしばらくして突然携帯電話で洞穴から、一三号地点の第三層で、極めて貴重な人骨が発見されたと伝えてきた。よくは分からないが前回の場所では何か長骨片が出たらしいとのことである。研究員の人達は急いで山に登って行った。

午後になってしばらくしたころだった。谷川の少し上流で作業していた愛知学芸大の女子学生の篩から腰椎が一つ出た。子供のもので胸椎に近いものだという。そして今度は下流側で洗っていた芦刈氏のところから、前歯一本と、三つぐらいの指の骨、それに柳葉状の剥離骨片が見つかり、最後に同氏の袋の残りを洗って、もはや何の遺物も無いと思っていた私の篩から、念押しに調べていた研究員が子供の奥歯一本を発見した。なかなか実りの多い一日であったが、その後はいくつかの炭化物を採取するに留まった。

午後三時近くになったころ、突然大きな音を立てながらヘリコプターが現れ洞穴の周辺を回り始めた。多分写

真を取るためであろう。やがて私たちの谷底近くまで降りてきたので遭難事故を起こしはしないかとひやひやしたが、ほどなく手を振りながら飛び去って行った。

それからまた少ししてNHKの中継車がやってきた。私はこれは何か上の洞穴で新しい発見があり、今朝上って行った取材記者が大きなスクープをものにしたに違いないと考え興奮した。もっともこれだけ慎重に進められている調査にそのようなことが有り得るはずも無く、やはり予定されていた取材だったと気づいたのは、家に帰ってからのことであった。

しかし、この日作業に出たことで、今回の調査が着実に成果を収めつつあることを確信するようになった。其の内容については調査の中間発表、講演会などの資料をもとに次回、じっくりと検討して見たい。

(続く)

#### 【参考文献】

◎「聖岳洞穴」リーフレット(編集 聖岳洞穴調査団、

発行 千葉県佐倉市・国立歴史民俗博物館)

◎ 聖岳洞穴発掘調査(タイプ刷り計画資料)

提供 聖岳洞穴発掘調査団